

Question.

下顎切歯の交換期に「乳歯の裏側から永久歯が生えてきた」、「生えてきた歯が大きいが並ぶのか？」と保護者が心配して連れてくるケースがよくあります。どのように対応したら良いのでしょうか？

質問者

(東京都 N.K. さん・96回)

Answer.

1. 下顎切歯の交換様式

乳切歯脱落前に永久切歯が乳歯の舌側から萌出してくる現象は下顎切歯交換期によく見られ、保護者が心配して受診されることがあります(図1)。



図1 6歳女児。下顎乳中切歯の晩期残存を主訴に来院した

通常、下顎永久切歯は乳切歯の舌側方向から乳歯歯根を吸収しながら、萌出を開始します。これは、下顎永久切歯が存在する顎骨が狭く、永久歯胚が舌側に叢生状態で存在するために生じる生理的な現象です。下顎永久中切歯の萌出では、下顎乳中切歯のあった位置より1.5 mm 舌側に萌出し、その後4ヵ月まで著しい唇側への移動を示し、1年間の移動量は約1.8 mm といわれています¹⁾。口腔内に萌出後は、舌圧により唇側方向へ移動しながら歯列内に排列します(エスカレーション交換、図2)。一方、上顎では、永久中切歯の歯軸は萌出開始まで乳中切歯とほぼ等しく、乳中切歯の脱落后そのまま同じ位置に萌出し、正常な被蓋関係となります(エレベーター交換、図2)。

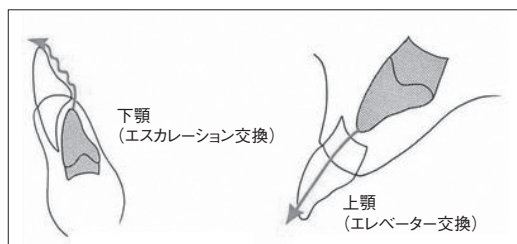


図2 切歯の交換様式

2. 抜歯が必要か否かの見極め

下顎乳切歯歯根が吸収し動揺が認められ、摂食痛などの症状がなければ自然脱落を待ちます。抜歯と聞くと嫌がる小児は多く、抜歯せずにすめばそれに越したことはありません。

しかし、乳切歯の歯根がうまく吸収されずに並存し、永久切歯の萌出障害を惹起している場合は抜歯の適応となります。このような場合、永久歯が通過した舌側の歯根は一部吸収されますが、唇側の歯根は吸収されずに残存し(図3)、自然脱落が困難となることがあります。ピンセットで触れても動揺がみられず、打診で濁音(歯根吸収あり)ではなく清音が認められれば歯根の吸収が進行していません。唇側の歯根が吸収されずに残存している乳切歯は、抜歯鉗子を歯頸部に合わせて歯冠を把持し、回転運動させながら最後に舌側方向に鉗子を引き上げて抜去します。抜去操作時に歯根破折しないように注意が必要です。



図3 抜去した乳切歯(舌側面観)

3. 下顎切歯の排列と問題点

切歯歯間幅径の総和に比べて、切歯歯槽部の長さ短い場合は、下顎切歯が舌側転位したままとなり、叢生になります。乳切歯と永久切歯の歯冠幅径の総和の差は下顎で約5 mm といわれています。永久切歯萌出期には、下顎で約4 mm の乳犬歯間距離の増加が認められます。臨床的に利用されている量はその半分程度と考えられており、叢生の量が2 mm 以内であれば自然に解消できるとされています²⁾。

また、乳犬歯舌側歯頸部の最深部間の距離を、6～7歳で22 mm を1つの指標にしており、20 mm 以下では要注意であり、18 mm 以下では自然な配列が期待できないことが多いといわれています¹⁾。実際に計測することで、将来的に矯正治療が必要か否かを推測することができると考えます。

参考文献

- 1) 坂井正彦：咬合誘導の実際，日本歯科出版，東京，1985。
- 2) 町田幸雄，坂井正彦編：日本歯科評論 増刊1996 より良い咬合育成を求めて，日本歯科評論社，東京，1996。

質問の回答者



きたざわ ひろみ
北澤 裕美

新潟病院 小児歯科